
死免蘇化

有明内海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死免蘇化

【Nコード】

N4550BA

【作者名】

有明内海

【あらすじ】

転校して来た俺は初日から空き巣に遭い、怒涛のような二日間を体験する

第一章1【転校生】

「黒井戸薪史くろいんどまねしです。宜しくお願いします」

「……」

一年五組の担任である大友先生の明るい挨拶が続いて、俺が淡泊に自己紹介を済ましたら妙な空気に。

無駄な個人情報省いたら名前だけで終わってしまい、そこに空しさだけが漂う。漫画やアニメだとその後ろに趣味や特技を付け加えるのだろうが、俺は多く語らなかった。

現実の転校生とはこんな簡素なものだろう。

？黒井戸君に質問のある方はいますか？と担任が促しを入れ、それに伴って生徒から質問があれば、不本意ではあるが仕方がなく個人情報かぎを公に翳すが、自ら先陣を切って翳すのは御免だ。そんなこと担任や生徒も望んでないだろうし。

それに、いきなり将来の夢について語り出したら皆の頭の中がパニックに陥るだろうし、自分のクラスにそんな奴が転入してきたらと思うと、恐らく誰も近付かない。いや、一周回ってして人気者になる可能性も秘めてるが、それは少数派。

俺からしたら第一印象最悪で、今後よっぽどの大逆転的な奇跡が起こらない限り、友達にはなってやれないだろう。いや、向こうから御免だろうな、俺なんて。

イレギュラー好きな人はともかく、俺は普通の高校生。あくまでも一般庶民の感覚の持ち主なので、余計な言動は慎んだ。

教室は殺伐とした空気をしている。それは俺が余計な言動を省いた所為せいではなく、その厳つい容貌とパワフルな体格、そしてハスキーで覇気を感じない、淀んだ声をしているからに他ならない。

自覚はしている。言い逃れができないほど、俺が不良然ふりようとした人相をしていると。

担任と生徒は反応に困っていたのだ。このクラスに場違いの不良

をどうしてくれようか、と。

「黒井戸君の席はあそこね」

結局？黒井戸君に質問？というコーナーはなく、厄介払いされるかのように席へと誘導された。

大友先生の視線を追った先は、後ろから二番目の窓際の席だ。転校生の俺にはあまりにも豪勢な席。不服などあるはずもなく、あつたとしても漏らすわけがないが。

俺は生徒の嫉妬の目を尻目に、指定された席へ足を運ばせた。

今日は九月三日、木曜日。

なぜこんな変則的な日取りに転校し、初登校を済ませたのかという、俺は入学して僅か三か月で退学になった不良だったから。

高一の一学期で退学になる奴は、相当な悪^{わる}ばかりなのはご存じだろう。

迂闊^{うかつ}だった……まさか俺が殴った生徒が、よもや校長の実の息子だったとは。

親にも呆れられ『顔も見たくない。一体いつ道を踏み外したんだか……親の顔が見てみたい。出て行けこの親不孝者！』などと散々詰^{なじ}られ、見放された。

それはそうだ、高校も無料^{ただ}じゃない。苦勞して溜めたお金を俺の将来に投資してくれたんだ。そして俺は見返りとして、その親の心情を無^{むい}為にするどころか、屑同然に蹂躪^{じゅうりゃん}して見せた。こっちこそ恥ずかしく、顔向けできる立場にない。

夏休みに寝る間も惜しんでアルバイトをし、田舎から都会へ引越して来たのだった。

？立派になって帰ってこい！？

父の心の叫びを背に引越しを終えたわけだが、その際にゴタゴタしてしまい、九月一日の入学式どころか、二日にも学校に登校できず、初っ端から二連休をかまして見せ、立派どころか未だ不良の鏡みたいな真似をしていた。

俺の通う高校、古城橋^{ふるきばし}高校は公立で、学費やら家賃は全て俺が負

担している。これが立派な親孝行だとしたら、一体何人の人が親不孝者なのだろうか。

仕送りを当然なし。

つい最近まで不良を務めていた少年にはあまりに過酷な生活であり、生き残るためには勉強とアルバイトの両立を図らなくてはいけなく、嫌でも規則正しい生活が要求され、？立派？に矯正される。父の狙いはまさにそこだったようだ。母はすでに俺のことを諦めるようだが……

まずは、この都会でバイト見つけることが先決か。今日にでも探してみるか。

しかし、今度ばかりは退学になるのだけは絶対に御免だ。

そのためにはなるべく、いや絶対に喧嘩は避けたい。できるのか？俺に……

「ねーねー、黒井戸君」

「ん？」

着席したと同時に頻りに声を掛けてくれていたらしいが、俺は気が付かなかった。

肩を叩かれることで漸く反応した俺。その方向に視線を移動させると――

うわぁ、もろタイプ！！

隣の席に座っていた女性の美貌たるや、俺のドストライクだった。粗なく綺麗に染め上げられた茶色の髪は肩に掛からない程度に、毛先が揃っている。朝シャワーを浴びて来たのだろうか、至福へと誘うラベンダー香りが俺を包み込んで行く――そんな気持ちにさせるほど、彼女は清潔感を漂わせていた。

顔立ちは整っていて、すごく可愛い……が、美人ともて囃されるタイプだろう。

一際俺の注意を惹き付けるのは、その豊満な胸だった。

夏服の制服から薄らと透けて見える挑発的な紺色の下着に、邪な考えを抱いたのは確かだ。

C? D? バスト85はあるかと思われ、明らかに周りの女子とは一線を画してる。容姿にしてもそうだ。

クラス一可愛いんだから俺が惚れるのも無理はないが、そもそもクラス一可愛いなんていうのは俺視点の話であって、好みドストライクなのだからクラス一可愛いと思うのが、故に必然なのだ。

俺は頬を紅色に染め上げ応答した。

「な、なに？」

田舎から出て来た俺にとって、この可愛さは革命的で、反則級の容姿と豊満な胸を使われ、おまけに転校して右も左もわからない俺に初めて声を掛けてくれた生徒だ。一目惚れするのも頷ける。

この時自分では気付いていなかったが、声の調子の震えが一目惚れの決定打となっていた。

「私は新月萌^{しんげつもえ}。三年間宜しくね」

圧倒的な可愛さ、美しさだ。

「よ、よ、よよよよ、よ……よろし……」

何吃^{おど}ってんだ、俺……！ 第一印象最悪じゃねえか畜生。いや、第一印象なんて見た目で決まるもんだし、それに俺のこの厳つい顔だ。最悪というより彼女からしてみれば災厄^{わざ}だろ。

気が付くと悲観^{ひかん}していた俺は、ボタンツと音がなるぐらい勢いよく机^{うづめ}に俯^{うつむ}いていた。

て、天使に会っちゃった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4550ba/>

死免蘇化

2012年1月12日11時54分発行